

等位接続詞と従位接続詞。

接続詞には「等位接続詞」と「従位接続詞」という2種類があり、それぞれの働きは全く異なります。

(1)等位接続詞。

①等位接続詞とは。

等位接続詞とは、具体的には **and**[そして]、**but**[しかし]、**or**[又は]、**for**[というのは～だからだ]、**nor**[もまた～ない]等のことです。

⚠特にforが後ろに「S+V」をとって、「I, for S+V～」という形で上記のような意味の接続詞になることを知らない受験生が意外と多い。
要注意。

②等位接続詞の働き。

等位接続詞の最大の特徴は、語と語、句と句、節と節とを**(対等の関係で)結びつける**ということです。

それから、等位接続詞は、**前後を対等の関係で結ぶ**のであり、

And S + V～, S + V… ⚠等位接続詞の後ろに2つの「S+V」がきてしまっている。

But S + V… ⚠等位接続詞が、前後の語句を結んでいない。

のような形はありません。ただし、

S + V～. For S + V… ⚠同じ「S+V」同士を結んでいる。

S + V～. But S + V…

という形は(「S+V～」と「S+V…」に内容的なつながりがあれば)ありえます。

(ex) John and Mary love each other. ジョンとメアリーは愛し合っている

⚠andは、語と語(JohnとMary)を対等の関係(つまり両者共に主語になっている)で接続している。

I will write either to the secretary or to the president.

私は秘書か社長のどちらかに手紙を出すつもりです

⚠orは、句と句(to the secretaryとto the president)を対等の関係(つまり両者共にwriteを修飾している)で接続している。

I wish to come, but I am going out with someone else this evening.

ご一緒したいのですが、今晚は別の人と出かける予定です

☞butは節と節(I would like~とI am going~)を対等の関係で接続している。

③等位接続詞によって結びつけられた両者は、構造的にも等しくなる。

つまり、等位接続詞によって結ばれた一方が「名詞」ならば、もう一方も必ず「名詞」であり、「動詞」だなんてことはありえない。一方が「S+V」なら、もう一方も「S+V」の同構造をしているというわけです。

形容詞	⎧ and ⎫ ⎪ but ⎪ ⎩ or ⎩	形容詞
S+V		S+V
前+名		前+名
⋮		⋮

読解においては、文中に等位接続詞 (and, but, or等)を発見したら、それらが何と何(誰と誰)を結んでいるのか、等位接続詞の左右の「同構造」をヒントにして、正確に見極めて下さい。その結ばれたもの同士には以下のような2つの共通点があるはずですよ。

- 1.構造的に等しい ☞例えば一方が「名詞」なら、もう一方も「名詞」。一方が「S+V」ならば、もう一方も「S+V」のはず。
- 2.文中での働き(機能)が等しい ☞例えば一方が文の主語になっているなら、もう一方も文の主語のはず。

特に3つ以上の語句を結びつける場合、「A, B and(or) C」のように、結びつける最後の語句の直前に and(or) をつけることが多いです。したがって、英文中で「A, B and(or) C」あるいは「A, B, C and(or) D」といった構造を発見したら、それらA~C(D)は共通して前後の語句にかかっており、それらは共通して1つの文の要素になっていると判断することが大切です。

(2)従位接続詞。

①従位接続詞とは。

従位接続詞は、具体的には if, because, when...とたくさんあるんですが、要するに先程説明した and, but, or等の等位接続詞以外の接続詞、と覚えてらいいでしょう。

②従位接続詞の働き。

従位接続詞は、必ず後ろに「S+V」の形をとり、その「(従+接) S+V」全体が主節(従位接続詞等のついていない、いわゆる裸の「S+V」)に対して、従

属(した)節になります(つまり両者の関係は"対等"ではない)。

④ 従位接続が頭に付いた節(S+V)のことを従位節(従属節・従節)と言う。言い方を変えれば、**従位節と主節を結びつけるのが従位接続詞の働き**です。で、従位節は、具体的に主節に対してどのように"従属"するかというと、それが以下のように2種類の従属の仕方があります。

1. **名詞節**(名詞の働きをする節。つまり文中でS、O、Cのどれかになる、又は前置詞の目的語になる)になる。

名詞(として働く)節をつくる従位接続詞には **that**、(「～かどうか」という意味になる)**if** と **whether** がありますが、その中の **whether** を使って名詞節を含む英文の例を挙げてみましょう。

④ 区別しやすいように、主節の主語がⓈ、主節の動詞がⓋなのに対して、従位節の主語はS、従属節の動詞はVと以下の例文では表す。

(ex)

Whether she said so
S V O

is uncertain. 「彼女がそう言ったかどうかは不確かだ」
Ⓥ C

Ⓢ

I don't know

Whether she said so
S V O

 . 「彼女がそう言ったかどうかは私にはわからない」
Ⓢ Ⓥ

O

The problem is

Whether she said so
S V O

 . 「問題は彼女がそれをやったかどうかだ」
Ⓢ Ⓥ

C

Everything depends on

Whether she said so
S V O

 . 「すべては彼女がそれをやったかどうかにかかっている」
Ⓢ Ⓥ (前)

【前置詞の目的語】

④ **that**節と、**if**節に関しては、(in that, except that以外は)基本的に前置詞の目的語にはならない。

2. **副詞節** (副詞の働きをする節。つまり文中の動詞や文全体を修飾する。S、O、Cにならない)になる。

副詞(として働く)節をつくる従位接続詞には **when**、**because**、**though**、(「もし〜」「たとえ〜としても」という意味の)**if**、(「〜であろうとなかろうと」という意味の)**whether**、**that**等があります。

(1) S+V~ (従・接) S+V...
 主節 従属節

(ex) I was late for school because I had missed my train.

私は列車に乗り遅れたので学校に遅刻した

☞従位接続詞のbecauseがつくる節全体が、副詞節として主節全体を修飾している。

(2) (従・接) S+V..., S+V~ ☞主節より左側に置かれる場合、主節とはカンマ(,)で区切られることが多い。
 従属節 主節

(ex) If Mom was here, she'd make us a hot cup of tea.

もしお母さんがここにいたら、熱いお茶を入れてくれるのに

☞従位接続詞のifがつくる節全体が、副詞節として後ろの主節全体を修飾している。

③主節は1つの文に1つだけだが、従属節は1つの文にいくつあってもいい。中には、従属節の中に、更に従属節があるなんていう文もあります。

1. (従・接) S+V..., S+V~ (従・接) S+V...
 従属節 ↑主節↑ 従属節

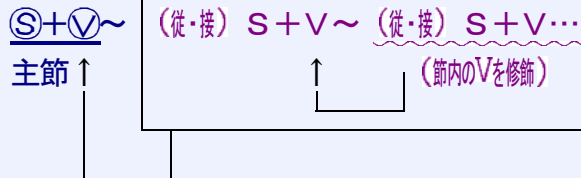
2. (従・接) S+V... (従・接) S+V..., S+V~
 従属節 従属節 ↑↑主節

3. S+V~ (従・接) S+V... (従・接) S+V...
 主節↑↑ 従属節 従属節

4. S+V~ (従・接) S+V (従・接) S+V...
 主節↑ ○(節内のOになる)

(ex) I came to like him since he said that he believed my story
 (主節) (従・節) S V O

5.



(ex) He got angry with her as she was singing when he was asleep
 (主節) (従・節) S V ↑

一つの文の中にいくつ節があってもかまわないとなると、一体どの節が一番大事なんだろうと思うかもしれません。それはなんといっても主節です。主節はその英文の情報(骨組み)の中心といってもいいでしょう。複数の節を持つ英文を見たら、まずこの主節(裸の「S+V」)を探し、それを見つけ、そこから文全体の骨組みを見極めていくことが大切です。

レクチャー2

that の用法。

英文を読んでいる中で、最も数多く見かける語のうちの1つが that です。「あれ、それ」という代名詞の that にはじまり、接続詞、関係代名詞…と、その用法は多種多様です。ここで that についての知識もきちんと整理してみましょう。

that には大きく分けて以下の5つがあります。

1. 指示代名詞の that。
2. (従位)接続詞の that。

- 3.関係代名詞の that。
- 4.強調構文をつくる that。
- 5.その他の that。

それぞれその that の使い方を確認していきましょう。

(1)指示代名詞の that。

これは

- ①「(空間的・心理的に話してから遠いものを指して)それ・あれ」
- ②「既出の内容」の代用。「それ(あれ)」と訳す。
- ③「the+既出の単数名詞」の代用。「それ」と訳す。

として用いられる that で、みなさん一番おなじみの that です。

(ex) What is that? あれは何ですか

I don't want to do that. 僕はそれをしたくない

The population of Tokyo is larger than that of Osaka.

東京の人口は大阪のそれ(人口)より多い

最後の例文の that は「the population」(つまり「the+既出の単数名詞」)の代用です。

また that は、名詞の前について形容詞的にその名詞を修飾し、「その・あの」という意味で使われることもありますね。

(ex) I don't like that song. 僕はその歌は好きではない

(2)(従位)接続詞の that。

これは「that S+V～」という形で用いられる that。この接続詞の that の後の「S+V～」は「完全な文」がきます。この接続詞の that が導く「that S+V～」(いわゆる that節)は、文中で

- ①名詞の働きをする(名詞節という)
- ②副詞の働きをする(副詞節という)

の2つの働きをします。以下にその具体的な働きを見てみましょう。

言言い方を変えれば、接続詞の that の導く節が「形容詞節」になることはない。「形容詞節(つまり直前の名詞を修飾する節)」になる that は、関係代

名詞の that (が導く節)。

①名詞節を作る that。

1. 「S(主語)」「O(目的語)」「C(補語)」になる。

that節が文の「主語(S)」「目的語(O)」「補語(C)」になるというのは、名詞節を作るthat節の最も代表的な用法です。この場合、訳し方は「～(する)こと」となります。以下に例文を挙げてみましょう。

(ex) That he said so is true. 彼がそう言ったことは本当だ
主語

It is true that he said so. 彼がそう言ったことは本当だ
[仮主語] [真主語]

主語(となるthat節)が長すぎる場合に、その長すぎる主語を文後半にまわし、空いた文頭(の本来の主語の位置)の部分に、仮の主語、Itが置かれる。これを「仮主語構文(形式主語構文)」という。

I thought that he was rich. 僕は彼は金持ちだと思った
目的語

The trouble is that I have no money. 問題は、金が無いということだ
補語

I found it strange that she wasn't there.
[仮・目] C [真・目]

私は彼女がそこにいないのが変だと思った

主目的語が長すぎる場合に、その(長すぎる)目的語を文後半にまわし、空いた部分に仮の目的語、itが置かれる。これを「仮目的語構文(形式目的語構文)」という。文中で「 $\textcircled{S}+\textcircled{V}+it+\text{形}\cdot\text{分}\cdot\text{名}+\text{that } S+V\sim$ 」という形をみたら、「it=仮目的語」「that節=真目的語」と見ていい。

2. 「同格節」になる。

これは

名詞 + that S + V ~

という形で、that節が直前の名詞の内容を具体的に説明し直す用法です。この

ような節を導く that のことを、「同格」の that といいます(内容的に同じことを言っているからと考えればいい)。訳し方は「～というA(名詞)」です。

(ex) I heard the news that he had passed the exam.

名詞 ↑
 └───┘ 彼が試験に合格したという知らせを聞いた

上の英文では that節全体が the news を修飾し、その中身を説明しています。

(ex) The suggestion was made that English teaching should be improved.

名詞 ↑
 └───┘ 英語教育を改善しようという提案がされた

上の英文でも that節全体が the suggestion を修飾し、その中身を説明しています。ただこの英文のように、先行する名詞と that節は離れ離れになる場合もあるので、その場合は注意が必要です(下線部和訳問題等では頻出)。

また、that節を同格節としてとれる名詞は、以下の2種類しかありません。

(1) 「思考」「認識」「発言」を表す名詞。☞要するに「言う」「思う」「知る(分かる)」から派生した名詞。

thought 「考え」 feeling 「感情」 notion 「意見・考え」
belief 「信念」 impression 「印象」 argument 「主張」
knowledge 「知識」 idea 「考え」 realization 「自覚」

(2) 「事実(真実・証拠・可能性等)」「情報(報告・うわさ等)」「命令(要求・提案等)」を表す名詞。

fact 「事実」 news 「知らせ」 order 「命令」 proof 「証拠」 notice 「通告」
chance 「チャンス」 possibility 「可能性」 evidence 「証拠」 rumor 「うわさ」
remark 「意見」

実際、文中で「思考」「認識」「発言」「事実(真実・証拠・可能性等)」「情報(報告・うわさ等)」「命令(要求・提案等)」を表す名詞の(直)後に that節を発見したら、まず「同格の that」であることがほとんどです。ただし、最終的な確認は、that直後に「完全な文」がきているかどうか(「不完全な文」がきていればそのthatは関係代名詞になる)で判断します。

3. 「前置詞の目的語」になる。

that節が前置詞の目的語になるのは珍しくて、以下の2種類しかありません。特に(1)は頻出で要注意です((2)は that は省略されることが多い)。

(1) in that S+V~ ①「～の点で」

②「～であるが故に、～なので」 =because

(ex) I was fortunate in that I was able to study under Dr. Smith.

スミス博士のもとで研究できた点で私は幸運だった

Television is very harmful in that it makes your mind passive.

テレビは精神を受動的にするのでとても有害だ

(2) except (that) S+V~ ①「もし～ということがなければ」

②「～(という点)を除いて」

=but[save] (that) S+V~

(ex) This wouldn't have happened except (that) we were all too tired.

我々みんなが疲れ切っていなかったらこんな事にはならなかっただろう

4.名詞節を作る that節で、決まり文句的なもの。

(1)It ~ that型。

1.It seems[appears] that S+V~ 「～のように見える、思われる」

(ex) It seems (to me) that Jesse is the key person.

=It appears (to me) that Jesse is the key person.

(私には)ジェシーが鍵を握っている人物のように見える

2.It happened[chanced] that S+V~ 「たまたま～した」

(ex) It happened that I met him on my way to the station.

=It chanced that I met him on my way to the station.

駅に行く途中で偶然(たまたま)彼に会った

3.It turned out that S+V~ 「結果として～だとわかる」

(ex) It turned out (that) I couldn't do so.

わたしにはそうすることができないことがわかった

4.It occurs to A(人) that S+V~ 「～がAの頭(心)に浮かぶ」

[strikes]

④「A(物事) occur to B(人):AがBの頭に浮かぶ」が下敷きとなっている仮主語構文。

真主語には、that節以外に、to不定詞や疑問詞節がくることもある。

(ex) It occurred to me that she might be the criminal.

=It struck me that she might be the criminal.

strike-struck-struck

=It flashed across my mind that he might be the criminal.

彼がひよっとすると犯人かもしれないという考えが私の心に浮かんだ

5.It follows that S+V~ 「~ということになる」

(ex) It follows from what he has said that Mr.James is innocent.

彼の言ったことから判断すると、ジェームズ氏は無罪ということになる

6.It is not too much to say that S+V~ 「~だといっても過言ではない」

(ex) It is not too much to say that Tiger Woods is a genius at golf.

=It is safe to say that Tiger Woods is a genius at golf.

タイガー・ウッズはゴルフの天才だといっても過言ではない(差し支えない)

7.It goes without saying that S+V~ 「~なのは言うまでもない」

(ex) It goes without saying that he succeeded in the entrance exam.

=Needless to say, he succeeded in the entrance exam.

彼が入学試験に合格したのは言うまでもない

8.It is likely[unlikely] that S+V~ 「~の可能性はある[ない]」

(ex) It is likely that he will succeed. 彼は成功しそうだ

=He is likely to succeed.

It is unlikely that she misunderstood you.

彼女が君のことを誤解したとは考えられない

(2)その他

1.It is that S+V~ 「それは(実情は)~ということである」

(ex) It is that I have my own business to attend to.

実は私には自分の用事があるのです

☞この構文の応用形として、助動詞がプラスされた

- ①It must be that S + V ~: ~であるにちがいない
- ②It may[might] be that S + V ~: ~かもしれない
- ③It might well be that S + V ~: きっと(おそらく) ~だろう
- ④It cannot be that S + V ~: ~であるはずがない

などがある。

2.(It is) not that S + V ~

【前文を受けて】「だからと言って~というわけではない」

(ex) I agreed. Not that I am satisfied.

私は同意した。だからといって私が満足しているわけではない

3.Not that S + V ~ but (that) S + V ... 「~ではないけれど、…だ」

(ex) Not that it really matters, but how did you know his name.

たいして重要なことではないけど、君はなぜ彼の名前を知っているの

②副詞節を作る that。

接続詞の that の導く、いわゆる that節が、文中で「主語(S)」「目的語(O)」「補語(C)」「同格の that節」のどれにもなっていない場合(つまり名詞節になっていない場合)、その that節は副詞節になっているとみます。副詞節を導く that節の意味は基本的に次の3つと見ていいでしょう。

- 1.so that S + may[will, can] + V ~
- ①「Sが~するために(できるように)」 [目的]
 - ②「その結果Sは~する」 [結果]

(ex) I got up early so that I could catch the first train.

一番列車に乗れるように私は早起きをした

His mother removed his brushes so that he couldn't paint.

母親が画筆を片付けてしまい、(その結果)彼は絵をかけなかった

會上の英文は「彼が絵をかけないように母親が画筆を片付けた」と[目的]と解することも可能。後半を , so that he wasn't able to paint とすれば結果の意味のみ。

2.

(1) S + V so $\left\{ \begin{array}{l} \text{形容詞(又は副詞)} \\ \text{形容詞+a+単数名詞} \end{array} \right\}$ that S+(can)+V…
「Sはとても～なので…する(できる)」 [程度・様態]

(ex) He was so kind that he showed me the way to the station.

彼はとても親切だったので、駅までの道を教えてくれた

He was so good a boy that he was loved by everybody.

彼はとてもいい子だったので、みんなから愛された

會上の英文のように so の後ろに「a+形容詞+単数名詞」を入れる
時には「形容詞+a+単数名詞」の語順にする。

(2) S + V such $\left\{ \begin{array}{l} \text{a+形容詞+単数名詞} \\ \text{(形容詞+)複数名詞(又は不可算名詞)} \end{array} \right\}$ that S+(can)+V…
「Sはとても～なので…する(できる)」 [程度・様態]

(ex) He was such a good boy that he was loved by everybody.

彼はとてもいい少年だったので、みんなから愛された

會上例のように such の後には「a+形容詞+単数名詞」を置くことができる。

Betty got such nice presents that she couldn't get to sleep.

ベティはとても素晴らしいプレゼントをもらったので眠つけなかった

會 such の後ろには複数名詞や不可算名詞を置くことができるが、
so の後には置けない。したがって以下のように言えない。

× She got so nice presents that she couldn't get to sleep.

(3) S + V~, so that S + V…: 「Sは～だ。その結果…だ」 [結果]

(ex) He misjudged the situation, so that his company went bankrupt.

彼は状況判断を誤り、その結果、彼の会社は倒産した

(4) S + be動詞 + such that S + V…: 「Sは大変なものなので…する」 [程度・様態]
「Sは…のようなものである」

(ex) Her anger[怒り] was such that she became ill.

彼女の怒りは大変なものだったので彼女は病気になってしまった

His behavior was such that everyone who knew him disliked him.

彼の態度は彼を知る者みなか彼を嫌うようなものだった

3.S+V (be動詞等)+形容詞(分詞) + that S + V…

(1) 「S(人)+be動詞+形容詞(分詞)+that S+V～」の構文の「be動詞+形容詞(分詞)」の部分は「think(思っている)」や「know(知っている)」で言い換えられることが多いのです。

(ex) Are you sure that you locked the door?

確かにドアにカギをかけましたか

會上の英文も「あなたはドアに鍵をかけたと思ってますか」で訳せてしまう。

(2)that節の(直)前に「感情を表す形容詞・分詞」があった場合、そのthat節は「～して」「～できて」と訳します。これは副詞用法の不定詞の場合と同じです。

(ex) She was angry that he had not won the race.

彼が競争に勝てなくて彼女は怒った

I am glad that I could see you again.

あなたに再会できてうれしいです

(3)that節の(直)前に「人の性格(質)を表す名詞・形容詞(分詞)」「good/bad型の形容詞(分詞)」があった場合、そのthat節は「～なんて」「～とは」と訳します。

(ex) Is he mad that he should say such a silly thing?

そんなバカなことを言うなんて彼は気がおかしいのか

(3)関係代名詞の that.

①関係代名詞の that とは。

that には関係代名詞の that もあります。その用法は以下の2つです。

1.主格の関係代名詞(who, which)や目的格の関係代名詞(whom, which)の代用として用いられる。

(ex) Baseball is a sport that boys like.

野球は少年達が好むスポーツです

會上の英文ではthatが目的格の関係代名詞(which)の代用として用いられ、that節全体がa sportを修飾している。

2.補語格の関係代名詞として用いられる。

(ex) Ted is not the kind man that he was ten years ago.

テッドは十年前の親切な人間では(今はもう)ない

そして関係代名詞の **that** が導く節の働きは、1つしかありません。それは(直)前の名詞(先行詞)を修飾することだけです。

②関係代名詞の**that**か？ 接続詞の**that**か？ その見極め方。

名詞の直後に置かれるという点で、関係代名詞の**that**と、同格の**that**(接続詞)は見分けがつきにくいですね。簡単な見極め方法は、

1.関係代名詞の後には「**不完全な文**」が来る。

☞「不完全な文」とは、S、O、C又は所有格のどれか一つが欠けた文のこと。

2.接続詞の後には「**完全な文**」な文が来る。

という点です。

(ex) This is a fact that is known to everybody.

名詞

上の英文の **that** の後ろは、主語が欠けた不完全な文。したがって **that** は「関係代名詞」と分かります。訳は「これはみんなに知られている事実です」。

(ex) Most people denied the fact that the earth is round.

名詞

上の英文の **that** の後ろは、「地球は丸い(the earth is round)」という完全な文。したがって **that** は同格の「接続詞」と分かります。訳は「ほとんどの人々は地球が丸いという事実を否定した」。

(4)強調構文をつくる **that**。

①強調構文とは。

強調構文とは、It is □ that~ の形で、□の部分に自分が強調したい語(句)を入れるというものです。この強調構文をつくる **that** については、品詞は考えなくて結構です(関係詞だ、接続詞だ...と言い切れないので)。

下記の英文を強調構文にせよ、という場合、それぞれ以下のようになります。

I saw Jack at the party a week ago.

一週間前私はパーティでジャックを見た

1. Jack を強調したければ

☞ It was Jack that I saw at the party a week ago.

2. I を強調したければ

☞ It was I that saw Jack at the party a week ago.

3. at the party を強調したければ

☞ It was at the party that I saw Jack a week ago.

4. a week ago を強調したければ

☞ It was a week ago that I saw Jack at the party.

②強調構文か？ 仮主語構文か？ その見極め方。

It is ~ that... となるという点では、強調構文と仮主語構文は区別がつきにくいですね。そんな区別のつきにくい両者を、一瞬で見極める方法を紹介します。

1. It is と that の間に「形容詞・分詞」や「副詞(句・節)」がある場合。

It is と that の間に「形容詞」や「分詞」があったら、それは仮主語構文だとみて間違いありません。

It is と that の間に「副詞(の仲間)」があったらそれは強調構文だとみて間違いありません。

(1) It is 形容詞・分詞 that 完全な文 . ☞ 仮主語構文

(2) It is 副詞(句・節) that 完全な文 . ☞ 強調構文

副詞(の仲間)とは、具体的には以下の3つです。

①副詞一語

(注)語尾が~lyで終わることが多い。あるいは'yesterday'のような時を表す名詞も副詞として用いられることが多い。

(ex) It was recently that the accident happened.

It was yesterday that I finished this work.

②前置詞+名詞

(ex) It was at nine thirty that I came home.

③接続詞+S+V~

(ex) It was since I was ill that I couldn't come here.

會ただし「前置詞+名詞」が形容詞句になっている場合は例外。仮主語構文とみなし「前置詞+名詞」がC(補語)になっているとみる。

そのような代表例としては「of+抽象名詞」や「beyond+範囲・限界を表す名詞」など。特に「cf+抽象名詞」は形容詞化するというルールは頻出。

以下はすべて仮主語構文(that節が真主語)。

(ex) It is of importance that you should study hard.

=important

君が一所懸命勉強することが大事だ

It is beyond belief that he was killed in the accident.

=unbelievable

彼がその事故で死んだということが信じられない

It was beyond a joke that you said such a thing in public.

人前でそんなことを言ったのは冗談の域を超えている

2.It is と that の間に「名詞(句・節)」がある場合。

It is と that の間に「名詞(の仲間)」があった場合、that の後ろの英文が「完全な文」なら仮主語構文、「不完全な文」なら強調構文とみていいでしょう。

(1) It is 名詞 that 完全な文 . ☞ 仮主語構文

(2) It is 名詞 that 不完全な文 . ☞ 強調構文

③注意すべきポイント。

1. 「不完全な文」とは、S(主語)・O(目的語)・C(補語)のどれかが欠けた文の

こと。

2. It is~thatの構文で、thatの後ろが「不完全な文」であれば、それは強調構文と見てほぼ間違いない。

④もちろん文頭のItが直前の単数名詞や直前の内容を指す代名詞、その後のthatが直前の名詞にかかる関係代名詞という英文中中にはあるので、先頭のItが文中で役割を持っているかどうかを確認する必要がある。つまりそのItが「それ」と訳せるなら強調構文ではない。逆にそのItが訳がつかない(文中での役割を持っていない)のなら強調構文ということになる。下の英文は強調構文のように見えるが、Itは「それ」と訳せ、またthatは単なる関係代名詞で、強調構文ではない。

(ex) Then it rained. It was a problem that we had been worried about.
[関・代]

その時、雨が降ってきた。それは私たちが心配をしていた問題だった

3. 強調構文だとわかったら、It is と that をカッコでくくってしまうといい。すると文の骨組みが浮かび上がってくる。

4. 強調したい語(句)が「人」の場合は、that の代わりに who, whom が使われることもある。

(ex) It is Tom who broke the window. 窓を壊したのはトムなんです

It is Nancy whom Jack loves. ジャックが好きなのはナンシーです

5. また強調したい語(句)が「物(事)」の場合は、that の代わりに which が使われることもある。

(ex) It is the dog which bit me yesterday. 昨日私を噛んだのはその犬です
bite-bit-bitten:かむ

It is the PC which I want to buy. 私が買いたいのはそのパソコンです

6. 強調構文が下線部訳問題になっていた場合、うまく和訳するポイントは、上記の例文の訳し方のように、強調されている語句を和訳の最後にもってくることである。

ただし、以下のように強調されている語句が「only+語(句・節)」の場合は、「~してはじめて(ようやく)…した」と、前から普通に訳せばいい。

(ex) It was only through their help that we coped with the crisis.

彼らの助けによってようやく私たちその危機を乗り越えることができた

7.イディオム的な強調構文として以下の構文は頻出。

It is[was] not until~ that S+V...:「~してはじめて…する[した]」

(ex) It is not until we lose our health that we realize its value.

健康を失ってみてはじめてその価値が分かる

8.疑問詞付き疑問文の強調構文。

疑問詞付き疑問文の強調構文の公式は以下の通りです。

疑問詞 is[was] it that+平叙文の語順?

要するに、疑問詞の後ろに「is[was] it that」を置き、その後を「平叙文の語順」に戻すわけです。たとえば以下のような普通の疑問文の場合、

(ex) What do you want to know? 君が知りたいのは何ですか

これを強調構文にすると以下ようになります。

What is it that you want to know?

[平叙文の語順]

和訳の際には is[was] it that の部分を()でくくってしまうといいのです。

(5)その他の that。

①先行詞を明示する that。

that/those の後に来る名詞が、先行詞であることを明示する用法があります。

下の例文の場合、which節の先行詞は tenderness ではなく、look であることを示しています。このような that/those は、日本語に訳出する必要はありません

(ex) She smiled with that look of motherly tenderness which is natural to all women.

彼女はすべての女性に本来備わっている母性的なやさしさに満ちた表情で微笑んだ

②副詞の that。

副詞の that は会話などで用いられることが多い。通例、疑問文や否定文で用いる。副詞の so とほぼ同じ意味。用法も同じ。

1. 「そんなに」「それほど」

(ex) Don't go that far. そんなに遠くへ行くな

He isn't all that rich. 彼はあまり裕福ではない

會否定文では、allが強調の意味で前につくことがある

If you are that rich, why do you need my money?

そんなに金持ちなら、何故私の金が必要なのか

2. [結果を表す節を伴って] 「とても」「それほど」

(ex) I failed the exam; it was that difficult.

その試験はとても難しくて私は落ちました

會 that much で「それだけ」「そんなに」といった用法もある。

(ex) He's spent that much. 彼はそれだけ使ってしまった

I don't like tennis that much. テニスはそれほど好きではない

レクチャー3

whether の用法。

(1) whether節がS・O・Cになったり、又は前置詞の後ろに置かれている場合、その
whether は「~かどうか」と訳す。

(ex) Whether it was true or not is still an open question.

S V C

それが本当かどうかは依然として未解決の問題です

I doubt whether it is true. それがかどうか疑わしい

S V O

The question is whether he was there. 問題は彼がそこにいたかどうかだ

S V C

It depends on whether it will rain or shine tomorrow.

(前)

【前置詞の目的語】

それは明日雨が降るか晴れるか(どうか)による

④ whether節内の or not は、whetherが「～かどうか」という意味になる場合、つけなくてもいい。逆に言えば or not が
ないwhether節は、100%「～かどうか」だと思って間違いない。

ただしor notがついている場合は、「～かどうか」、「～であろうとなかろうと」両方の意味の可能性があるので注意。

④ whetherの直後に「or not」がくることがある。

(ex) I asked him whether he liked her or not.

=I asked him whether or not he liked her.

④ 「whether to do～」という形で、「～すべきかどうか」という用法もある。

(ex) I can't decide whether to go (or not).

行くべきかどうか決心がつかない

(2) whether節がS・O・Cにならない場合、その whether は「～であろうとなかろうと」と訳す。

(ex) Whether he succeeds or not, he will do his best.

S V O

成功してもしなくても、彼は最善を尽くすだろう

④ S O Cにならない場合のwhetherは、必ずor not[A or B]とセットで用いる。

(3) 「～かどうか」となる場合の whether と if の使い分け方。

カンタンな覚え方は、if が「～かどうか」となるのは、他動詞の目的語になる
場合で、それ以外で if が「～かどうか」という意味になることはないとい
うことです。

S	⎧	know 「分かる」	⎥	if S+V~
		ask 「尋ねる」		
		doubt 「疑う」		
		see 「調べる」		
		tell 「分かる」		
		wonder「思う」		
	V			O

④例外としては、if節が真主語になる場合は「～かどうか」という意味になるこ
とはある。ただしこれはくだけた(ものの)言い方である。

(ex) It is not important whether[=if] he will come or not.

[仮・主]

[真・主]

④それ以外は「～かどうか」は基本的に whether を用いる。

詳しくは以下を参照してほしいが、これらは特に丸暗記の必要はない。

①他動詞の目的語となる場合、whether と if はどちらを用いてもよい。

(ex) I doubt whether[=if] it is true. それが本当かどうか疑わしい

S V

O

②whether は直後にto不定詞をとって「whether to do～:～すべきかどうか」という形があるが、if にはこれがない(× if to do～)。

(ex) I can't decide whether[×if] to go (or not).

行くべきかどうか決心ができない

③whether は直後に or not を持つてくることができるが、if にはこれがない

× if or not S+V～

○ whether or not S+V～

④whether は「主格補語」になれるが、if はなれない。

(ex) The question is whether[×if] he was there (or not).

S

V

C

問題はかれがそこにいたかどうかだ

⑤whether は「主語」になれるが、if はなれない。

(ex) Whether[×if] it was true (or not) is still an open question.

S

V

C

それが真実であるかどうかは依然未解決の問題です

⑥whether は、名詞の後ろにおかれてその名詞と同格になることがあるが、if にはこの働きはない。

(ex) There remains the question whether[×if] he knew the secret (or not).

名詞

=

「同格」のwhether節

彼がその秘密を知っていたかどうかは疑問が残る

⑦whether は前置詞の後ろに置けるが、if は置くことはできない。

(ex) It depends on whether[×if] it will rain or shine tomorrow.
それは明日雨が降るか晴れるかによる

レクチャー4

接続詞を用いた「時」に関する重要構文。

(1)It will not be long before S+V～. 「まもなく～するだろう」

(ex) It won't be long before he can speak English. won't = will not
すぐに彼は英語を話せるようになるだろう

(2)It was not long before S+V～. 「まもなく～した」

(ex) It was not long before I realized the trick.
まもなく私はその計略に気付いた

①(1)(2)は、共に soon, before long を用いて書き換え可能。

→ I realized the trick soon.

(3)③+had not+p.p.～ before[when] S+V【過去形】… 「～しないうちに…した」

(ex) I had not waited long before he came along.
そんなに待たないうちに彼がやってきた
I had not gone very far before it began to rain.
そんなに遠くに行かないうちに雨が降りだした

(4)by the time S+V～ 「～する頃までには」

(ex) I will have finished my work by the time you come back.
君が戻ってくる頃までには、私は仕事を終えてしまっていることだろう

④特に主節が未来完了形の場合には、上例のように「～するころまでには…してしまっているだろう」と訳すといい。

(5) every[each] time S+V ~ 「～するたびごとに」

「～する時はいつも[必ず]」 = whenever, any time

(ex) Each time a man came in, another went out.

1人が入ってくるたびに、別の1人が出ていった

She says something every time I turn around.

私が顔を出すと彼女はいつも文句を言う

(6) any time S+V ~ 「～するときはいつも[必ず]」 = whenever

(ex) Any time she couldn't have her own way, she got angry.

彼女は思い通りにならないときはいつでも腹を立てた

(7) The first[next/ last] time S+V ~ 「はじめて[今度/最後に]～する時(に)」

(ex) The first time I visited the town, I met my wife.

はじめてその街を訪れた時、私は妻と出会ったのだ

(8) It is not until ~ that S+V.... 「～してはじめて…する」

(ex) It is not until we lose our health that we realize its value.

健康を失って初めて我々はその価値に気付く

會上例は以下の英文を強調構文にしたもの。

We do not realize its value until we lose our health.

私達は健康を失うまで、その価値に気付かない

會 It is と that が省略されると、後半の主節は疑問文と同じ語順になる。

→ Not until we lose our health do we realize its value.

【疑問文の語順】

同じ書き換えの例をもう1つだけ挙げてみよう。

I didn't know the news until last night.

私は昨夜までその知らせを知らなかった

= It was not until last night that I knew the news.

私は昨夜になって初めてその知らせを知った
=Not until last night did I know the news.

【疑問文の語順】

レクチャー5

「～までに(は)」と「～まで」の違い。

(1) 「～までに(は)」。

「～までに(は)」という意味を表すものには by と by the time があります。両者の違いは品詞で、by は「前置詞」。by the time は「接続詞」です。つまり、両者は同じ意味でも by は(前置詞なので)直後に「名詞(の仲間)」をとり、by the time の方は(接続詞なので)直後に「S+V～」をとります。

(ex) I will finished it by 8 o'clock. 8時までにそれを終えます
[名詞]

I will have a house of my own by the time I'm fifty.
50歳になるまでには自分の家が持てるだろう S+V

(2) 「～まで」。

「～まで」という意味を表すのは until[till]です。until[till]の場合、前置詞、接続詞両方の品詞があります。つまり「until[till]」の後ろに「名詞」があればその「until[till]」は前置詞、「S+V～」があれば接続詞と見たらいいでしょう。

(ex) She will stay here until next Sunday.
[前置詞] [名詞]

彼女は次の日曜日までずっとここにいる
Until she came back, none of them went out.
[接続詞] S+V

彼女が戻るまで誰も外に出なかった

(3) 「by(又はby the time)」と「until[till]」の使い分け。

by(又はby the time) は「までに(は)」、until[till] は「まで(は)」です。
意味から区別が付きにくい場合には、以下を参考にしてください。

① 「by(又は by the time)」は、「期限」にその焦点がある。

1.後ろには「期限」を表す語句が来る

2.主節には「(期限までの)完了・達成」の意味を表す動詞が来ることが多い

のが特徴です。いくつか例を挙げてみましょう。

(ex) I shall **have finished** it **by tomorrow**.

明日までにはそれを終えてしまっているだろう

The work will **be finished** **by 8 o'clock**.

仕事は8時までには終わるだろう

Will you **finish** it **by tomorrow morning**?

明朝までにそれをやり終えてくれませんか

Daylight had **come** **by the time the meal was over**.

食事が終わるころまでには夜が明けていた

確かに上の例文でも finish, be finished, come は「完了・達成」の意味を表す動詞であり、by (the time)の後ろには「期限」を表す語句がありますね。

② 「until[till]」は「期限」までの「行為・状態」にその焦点がある。

1.後ろには「継続の終点を示す」語句が来る

2.主節には「(期限までの)継続」の意味を表す動詞が来ることが多い

のが特徴です。これもいくつか例を挙げてみましょう。

(ex) He will **stay** here **until next Sunday**.

彼は次の日曜日までずっとここにいる

Wait until tomorrow morning. 明日の朝まで待ちなさい

Don't give up until you attain your goal.

目標を達成するまであきらめるな

確かに上の例文でも、stay, wait は「継続」の意味を表す動詞です。

Don't give up も、「あきらめない」ということは、裏を返せば「がんばり続ける」わけで、これも「継続」を表しています。そして until の後ろにはそれぞれ「継続の終点を示す」語句がきていますね。

レクチャー6

「理由」を表す意外な接続詞。

(1), for S+V~ 「というのは~だからだ」

(ex) It was just twelve o'clock, for the church bell was ringing.

ちょうど12時だった。というのは(なぜなら)教会の鐘が鳴っていたからだ

(2)now (that) S+V~ 「(今はもう)~だから」

(ex) Now (that) we are all here, we can begin.

みんな集まったからには始められるぞ

(3)seeing (that) S+V~ 「~だから」

(ex) Seeing (that) you don't know about it, nobody can blame [非難する] you.

それを君自身は知らないのだから、誰も君を非難することはできない

(4)on the ground(s) (that) S+V~ 「~という理由で、~なので」

(ex) My nephew was excused on the ground that he was young.

私のおいは若さに免じて許された

ground:「根拠」

(5)in that S+V~ 「~という点において、~だから」

(ex) Men differ from brutes in that they can think and speak.

人間は考えたり話したりできるという点でけだものとは違う

「条件」を表す意外な接続詞。

(1) in case S+V～ 「もし～の場合に(備えて)」

(ex) In case I'm late, don't wait for me to start dinner.

もし私が遅れたら、待っていないで食事を始めなさい

Take your umbrella with you in case it rains.

雨が降る場合に備えて傘を持って行きなさい

(2) suppose[supposing] (that) S+V～ 「もし～なら」

(ex) Suppose[Supposing] your father saw us together, what would he say?

君の父さんが僕達が一緒にいるのを見たら、なんて言うだろう

(3) Assuming (that) S+V～ 「もし～なら」

(ex) Assuming (that) you are right, you may carry out the plan.

もし君が正しいなら、その計画を実行してもよろしい

(4) on (the) condition (that) S+V～ 「もし～なら」

(ex) He can go out on condition (that) he comes home by five.

彼は5時までに帰宅するのなら出かけてもよい

(5) unless S+V～ 「～でない限り」

(ex) You will miss the last train unless you walk more quickly.

もっと速く歩かない限り、最終列車に乗り遅れますよ

(6) providing[provided] (that) S+V～ 「もし～なら」

(ex) Providing[Provided] you accept my offer, I will do anything.

もしあなたが僕の申し出を受け入れてくれるなら、なんでもします

①「supposed (that) S+V～」や、「provide (that) S+V～」という形はない。

②「Suppose (that) S+V～」は命令文なので、文頭で必ず用いるという点も頭

に入れておこう。

③「suppose[supposing]」「in case」以外は仮定法で使うことはない。

④ Supposing (that) S+V～ は、元々 If you suppose (that) S+V～ だった
(それが分詞構文となったもの)と考えるといい。

④ providing (that) S+V～ は元々 If you provide (that) S+V～ だった。
provided (that) S+V～ は元々 If it is provided (that) S+V～ だった
(それが分詞構文となったもの)と考えるといい。ちなみに provide that
S+V～ で「～と規定する」という意味が(元々の動詞の provide には)あ
るのだ。

(7) given (that) S+V～

「～と仮定して」

「～を考慮に入れるなら(入れると)」

「～があれば」

(ex) Given (that) the radius is 20cm, find the circumference.

半径を20センチとして、その円周を求めよ

Given (that) one is in good health, one can achieve anything.

人間健康でいられれば、何でも成し遂げられる

④ 「given+A(名)」となることもある。その場合は given は前置詞と
見なされる。

(ex) Given his inexperience, he's done a good job.

経験がないことを考えれば、彼は良い仕事をした

Given the chance, I want to challenge it.

チャンスがあれば、それに挑戦してみたい

レクチャー8

in case の用法。

(1) 「もし～なら」 =if S+V～

(ex) In case anything happens, call me immediately.

もし何かあったら、すぐに電話してください

(2) 「～の場合に備えて、～だといけないので」 ☞ just in case S+V～
となることもある。

(ex) You had better take an umbrella in case it rains[shculd rain].

(万一)雨が降るといけないから傘を持っていきなさい

☞ in case の後の動詞が「shculd+do～」となるのは、予想される事柄が起きる可能性が低いと話者が考えているような場合。

(3)[just in case という形で] 「万一の用心に、万が一に備えて」

(ex) You'd better take a raincoat just in case.

万一の用心にレインコートを持っていった方がいいよ

レクチャー9

「as ~ as S+V…」という形で接続詞的に使われるもの。

(1) as[so] often as S+V～ 「Sが～するたびに」
=each time S+V～

(ex) As often as she tried, she failed. 彼女はやるたびに失敗した

(2) as[so] soon as S+V～ 「Sが～するとすぐに」

(ex) As soon as I arrived, I called him up.

私は到着するとすぐ彼に電話をかけた

(3) 「as[so] far as」と「as[so] long as」。

① as[so] far as S+V～ 「～に関する限りでは、～について言えば」

(ex) as far as S is concerned Sに関して言うと、Sに関する限り(では)

as far as I know 私の知る限りでは

as far as the eye can see[reach] 目の届く限り

as far as we can judge 我々の判断できる限りでは

☞なお as far as には、上記以外に以下のような用法もある。

[as far as A(場所を表す名詞)/S+V~] : Aまで、~(と同じ距離)まで
(注)否定文に限り so far as 可。

(ex) Go along this street as far as the corner, and then turn left.

この通りを角まで行って左へ曲りなさい

The mountain wasn't so[as] far off as it looked.

山は見た目ほどは遠く離れていなかった

②as[so] long as S+V~

1.[時] 「~する限り、~する間は」 =while S+V~
=for as long as S+V~

(ex) As long as he's here, I'll have more work to do.

彼がここにいる限り私の仕事がふえらるだろう

2.[条件] 「~(し)さえすれば」 =if only S+V~ (注)仮定法には用いない。

(ex) I don't care as long as you are happy.

あなたが幸せでありさえすれば私はかまわない

=I don't care if only you are happy.

※ちなみに only if S+V~ は「~の場合にのみ(だけ)」。

(ex) She'll succeed only if he works hard.

一生懸命働いた場合にのみ彼女は成功するだろう

(一生懸命働かない限り、彼女は成功しないだろう)

④なお as long as には、上記以外に以下のような用法もある。

[as long as A(時を表す名詞)]: Aの間、Aもの長い間

(ex) He suffers from stomachache as long as five years.

5年もの間、彼は胃痛に苦しんでいる

③「as[so] long as」と「as[so] far as」の使い分け方。

「as long as」と「as far as」は、いずれも「…する限りでは」と訳されますが、前者(つまりas[so] long as S+V~)は「時間の限度」と「条件」を表し、後者(つまりas[so] far as S+V~)は「範囲(程度)の限度」を示すのが違いです。つまり「範囲」というニュアンスが感じられる場合には as[so] far as を、「期間・条件」のニュアンスが感じられる場合には as[so] long as を使うと

いいでしょう。

レクチャー10

「Sが～するために(できるように)【目的】」を表す接続詞。

(1) **so that** S+may[can/ will]+V【原形】～

(ex) Talk louder so that I may hear you. ④so と that は、どちらかを省略することも可能。

聞えるようにもっと大きな声で話してください

We tied him up so that he wouldn't be able to escape.

逃げられないように彼をきつくしばった

(2) **in order that** S+may[can/ will]+V【原形】～

(ex) She will come early in order that you may read her manuscript.

彼女は自分の原稿をあなたに読んでもらうためにきっと早く来るでしょう

レクチャー11

「～するとすぐ…した」を表す構文。

(1) **As soon as** S + V【過去】～, S₁ + V₂【過去】…

=(At) The moment

=The instant

=The minute

=The second

=Immediately

(2) **On Ving**～, S₁ + V₂【過去】…

(3) **S + had + □ + p.p. ～ ■ S₁ + V₂【過去】…** ④(3)だけは、前半部分が「過去完了形」になる。

□ + had + S + p.p. ~ ■ S₁ + V₂ [過去] … ☞ □ が文頭に出ると、直後が疑問文と同じ語順に変化する。

□ : ■
no sooner than
scarcely when[before]
hardly when[before]

(ex) As soon as he saw me, he began to cry. 彼は私を見るとすぐに泣き出した

=The moment he saw me, he began to cry.

=The instant he saw me, he began to cry.

=The minute he saw me, he began to cry.

=Immediately he saw me, he began to cry.

=On seeing me, he began to cry.

=At the sight of me, he began to cry. ☞ at the sight of A: Aを見るとすぐに

=He had no sooner seen me than he began to cry.

=No sooner had he seen me than he began to cry.

=He had scarcely seen me when[before] he began to cry.

=Scarcely had he seen me when[before] he began to cry.

=He had hardly seen me when[before] he began to cry.

=Hardly had he seen me when[before] he began to cry.

レクチャー12

「so~that S+V…」と「such~that S+V…」。

(1) such ~ that S+V… 「Sはとても~なので…だ」

such ~ that S+V… の場合、such の直後(つまり「~」の部分)には

- ① a[an]+形容詞+可算名詞
- ② (形容詞) 不可算名詞[複数名詞]

のいずれかが来るのが特徴です。

S + V such a[an]+形容詞+可算名詞 that S + V...

S + V such (形容詞) 不可算名詞[複数名詞] that S + V...

(ex) She is such a smart girl that everybody admires her.

彼女はとても頭のいい子だったのでみんなが彼女に憧れた

They were such brave guys that the villagers trusted them.

彼らはとても勇敢な人たちだったので村人たちは彼らを信頼した

(2) so ~ that S + V... 「Sはとても～なので…だ」

so ~ that S + V... の場合、so の直後(つまり「～」の部分)には

① 形容詞+a[an]+可算名詞

② 形容詞[分詞]、又は副詞

のいずれかが来るのが特徴です。

S + V so 形容詞+a[an]+可算名詞 that S + V...

S + V so { 形容詞[分詞] } that S + V...
 { 副詞 }

(ex) John's wife is so young that she is pretty without makeup.

ジョンの奥さんは若いから、お化粧しなくてもきれいだ

He was so kind a boy that he was loved by his family.

彼はとても親切だったので、家族から愛された

⚠特に、so の直後が「形容詞+a[an]+可算名詞」の語順を問う問題は頻出。

このような語順になるのは、副詞の「so」「as」「how」「too」の直後に、冠詞の「a」を置くことはできないというルールのため。

上の英文も、such を用いれば、以下のように(通常の語順で)書き換えられる。

→ He was such a good boy that he was loved by his family.

⚠それから so の後には不可算名詞や複数名詞はこれない点に注意。その場合には such を用いる。

(ex) I wrote it down for fear (that) I should forget it.

それを忘れるといけないと思って書き留めた

この構文は、どこにも not 等の否定語はついてにもかかわらず、否定の内容を表すので頻出です。またこの構文は、

- ① so that S+may[will/ can]+ not+V [原形]～
- ② in order that S+may[will/ can]+ not+V [原形]～
- ③ in order not to V [原形]～
- ④ so as not to V [原形]～

で書き換えることができます。

→ I wrote it down so that I would not forget it.
=in order that I would not forget it.
=in order not to forget it.
=so as not to forget it.

- (3)unless S+V～ 「もし～でないなら」 ≡ if + not
「～しない(でない)限り」 ≡ except that S+V～
「～する場合を除いて」

(ex) She will go unless it rains. 雨が降らなければ彼女は行くでしょう
Unless I am too busy, I will meet you.
それほど忙しくなければあなたにお会いします

unless で注意しておきたいのは、「unless = if + not」と単純に覚えていると答えが見つからない場合があることです。

次の問題を見てください。これ、実際にセンターで出題された問題です。

「unless = if +not」と覚えていた受験生が、全員答えに窮してしまった問題なのです。

問: His driving is very rough. (), it is surprising.

- ①Unless he causes an accident
- ②If he doesn't cause an accident

正解は②です(「彼の運転はとても荒っぽい。もし彼が事故を起こさないとすれ

ば、それは驚きだ」)。

①は unless を「もし～でなければ(=if + not)」ではなく、「～しない(場合に)限り」と訳せば、「彼が事故を起こさない(場合に)限り」となり、これを空欄に入れると文全体は「彼の運転は荒っぽい。彼が事故を引き起こさない(場合に)限り、それは驚きだ」というおかしい意味になってしまいます。unless を「～しない(場合に)限り」「～という場合を除いて」と訳すことを知っていて、はじめておかしいとわかるわけです。このように **unless** の特徴は、(単に「もし～でなければ」というより)主節の内容を否定するための「唯一の条件」を示し、「…という条件の場合を除いて」という排他的な意味が強いのです。

※先程の問題でも、「私が驚かない」ための条件は(可能性として)無数にありうるし、まして「彼が事故を起こさないこと」がその「唯一の条件」となるわけもない。

それから **unless** は「仮定法」と共に使うことは(基本的に)ないという点にも注意しておくといいいでしょう。

(4)once S+V～ 「ひとたび(いったん)～すると」

(ex) I never wake before six o'clock, once I get to sleep.

僕はいったん眠りについてしまったら6時前には決して目を覚まさない

once には「昔」「かつて」「一回」といった、名詞や副詞の once もあって見極めに苦労します。簡単な「接続詞の once」の見極め法は、以下のように**2つの「S+V」をつないでいる once は接続詞であると見たらいい**でしょう。

① Once S+V～, S+V…

(接)

② S+V～, once S+V…

(接)

(5)while S+V～

①～の間(時)に、～ながら(も)

(ex) You should get ready while I am playing with my daughter.

私が娘と遊んでいるうちに準備をしてしまいなさい

②～だけれど、～のに、～の一方(で) =whereas

(ex) While I sympathize, I can't really do very much to help.

同情はするが、私には実際は大したお手伝いはできません

③その一方(で)～ =whereas

(ex) Wise men seek after truth, while fools despise it.

賢者は真理を求めるが、愚者はこれを侮る

③の意味になる場合、while は(多くはカンマとセットで)必ず文中盤で使われる。

(6)even if [though] S + V～

①たとえ～としても

(ex) You have another chance even if you fail this time.

たとえ今回はうまくいなくても、もう一度チャンスがある

even although という言い方は(基本的に)ない。

even though と even if の違いは、even if はあくまで if の強調表現であり、節内の内容は「条件」であって現実(事実)ではない。

それに対し even though はあくまで though の強調表現であり、節内の内容は、(譲歩された)現実(事実)である。

(ex) Even if you don't like sweets, try this.

たとえ君が甘いものは嫌いだとしても、これを試しに食べてみて

上の英文は、実際 you は甘いものは嫌いなのである。

(ex) Even if it rains or snows, he always go fishing every Sunday.

たとえ雨が降ろうが雪が降ろうが、彼は毎週釣りに出かける

上の英文の場合、雨や雪というのはあくまで(たとえとして出された)条件であって、現実(事実)に今、それが降っているわけではない。

②もっとも～だが、(とはいえ)～だけれども

主節の後ろで、補足的に用いられる。

(ex) He insists on going there himself, even though I don't know why.

彼は自分で行くと言い張っている。理由は私には分からないが

- (7) 命令文+ 「…せよ」
- | | |
|---|---|
| { | <u>and</u> S will V【原形】～ ……せよ。 <u>そうすれば</u> ～だろう |
| | <u>or (else)</u> S will V【原形】～……せよ。 <u>さもないと</u> ～だろう |

(ex) Start now, and you will be in time for the meeting.
 今すぐ出発しなさい。そうすれば会合に間に合うでしょう

Start now, or you will miss the train.
 今すぐ出発しなさい。さもないと列車に乗り遅れますよ

and/ or の後ろには未来の内容が来ます。

また、以下の例文のように命令文でなくても、それに相当する表現であれば、直後で同じように and(そうすれば) や or(さもないと) を使用することがあります。

(ex) You have to hurry up, or you will miss the train.
 急がなくてはなりません。さもないと列車に乗り遅れますよ

You must leave now, and you will catch the bus.
 今出発しないと行けません。そうすればバスに間に合います

(8)if S+V～

- ①if節が他動詞の目的語(要するに名詞節)になる場合、「～かどうか」と訳す。

(ex) Do you know if he understands the matter ?
 S V O
 彼がその問題を理解しているかどうかわかりますか

I wonder if she is ill. 彼女は病気かしら
 S V O

- ②それ以外のif節(要するに副詞節になる場合)は、「もし～(なら)」「たとえ～としても(=even if)」のいずれか。

(ex) If you ask him, he will tell you. 彼に聞けば教えてくれるだろう
 I'll do it even if it costs me much money.
 お金がとてもかかるとしても私はそれをするつもりだ
 If he is poor, he looks happy. 貧乏でも彼は幸せそうだ

(9) 否定文 + because S+V～ 「～だからといって」

(ex) You must not be ashamed because you are poor.

貧乏だからといって恥じてはならない

You must not despise him simply[just, only] because he can't do that.

単にそれが出来ないという理由で彼を軽べつしてはいけない

上例のように、否定文と共に用いられる because は、「～だからといって」という意味になることが多いのです。

ただし、否定文と共に用いられる because の全てが、そのような意味になるわけではありませんから注意してください。

(ex) I don't like him, because he is not clever.

私は彼が好きではありません。なぜならば彼は頭が良くないからです

上の英文の because は、否定文と共に使われていますが、通常の「なぜならば～」という意味ですね。

この意味(「～だからといって」)になる because の特徴は、以下の2点です。

- ① because の前にカンマ(,)が置かれない。
- ② 「(ただ)単に」という意味の just, simply, merely 等の副詞が because の直前に付くことが多い(必ずではない)。